

指銭の種類と負担をめぐって
—須田家文書「指銭帳」の検討—

門 前 博 之

Regarding the Types and Burden of *Sashisen* :
An examination of the “*sashisen-cho*” documents of the Suda Family

KADOMAE Hiroyuki

In this short essay, I investigate village expenditure in villages during the Edo period by way of an examination of 26 “*sashisen-cho*” (ledgers of village rates) from among the documents of the Suda Family. While closer examination is still needed in many parts, my examination sheds light on a number of points. For instance, although there had been about five types of *sashisen* (village rates), such as for the cost of paper used in various books and registers, it is clear from the *sashisen-cho* of 1654 (Jouou 3) that the types of *sashisen* diversified. Also, regarding how *sashisen* were borne, whereas they had been collected per *kumi*, which are believed to be a unit of families in separate districts within a village, from 1659 (Manji 2), they began to be collected from individual villagers without going through the *kumi*. It had also been inferred that there were village expenditures not recorded in the *sashisen-cho*, and it was thought that a facet of village expenditures, including these kinds of village expenditures, is that they were provisionally paid for and managed by *shoya* (village headmen).

《個人研究第2種》

指銭の種類と負担をめぐって

—須田家文書「指銭帳」の検討—

門 前 博 之

はじめに

1989年夏横浜市万騎が原の故須田正男氏を通じてその本家文書を発見し、目録作成から始めてその文書群を近世村落の形成という関心から検討を始めた。検討はなかなか進捗しないが、旧常陸国行方郡牛堀・永山両村の庄屋を勤めた須田本家の文書群は、2008年1月に茨城県立歴史館への寄託が成立した。この寄託によって、本家・新宅によって保持されてきた須田家の文書群は、その寄託以前から同歴史館にあるに新宅文書と2008年1月に寄託が成立した本家文書、及び、それ以前からの旧文部省史料館所蔵（現大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館）になる須田家（新宅）文書との三群となった。今回の小論の目的は、茨城県立歴史館に旧蔵されてきた須田家文書中にある慶安2年以降貞享5年に至る26冊の指銭帳類を中心にしながら指銭の種類やその性格、及びその負担について検討することが目的である。指銭は一般に言う村入用のこととされるが¹⁾、その種類・費目、徴収方法、負担者の検討は牛堀・永山両村が近世村落としての形成を捉えていく上で、重要な手掛かりとなろう。指銭帳類の検討をする前に、先ず指銭が水戸藩の法令やその他史料にどのように現れているのか確認しておこう。

注

- ¹⁾ 例えば『水戸市史』中巻(1)の「第2章 寛永検地と支配体制の進展」では「以上（正祖・雑税・夫役一筆者）のほか、村入用に充てるため、村ごとに取り立てたものに指銭がある」としている。

1 法令その他に見る指銭

管見の限り水戸藩の指銭の語の現れる法令類としては、高倉胤明『田制考証』⁽¹⁾に収められた寛永

元年11月の「覚」のほか、寛文11年8月の「覚」⁽²⁾、元禄13年8月の「定」⁽³⁾享保7（カ）年6月の郡奉行・代官の定書⁽⁴⁾、寛延3年6月の「指銭改様之事」⁽⁵⁾、天明5年8月の郡奉行達⁽⁶⁾、等がある。また、文化年間後半に完成した坂場流謙著の地方書『国用秘録』⁽⁷⁾にも「松岡御領分百七拾三ヶ村分指銭惣括之事」という項目がある。流謙はそこで寛政2年分の松岡領の指銭の総額金5,595両本375文に「御國中四ヶ一成、四郡合大図金貳万両以上、指銭百姓より出ル也、年貢之外ニ如此掛り銭多く、百姓困窮するもの也」と注記を付し、指銭が百姓困窮の一因となっていることを述べている。

管見の限り最初に指銭の語が確認される寛永元年11月「覚」は、山田四郎右衛門より久慈郡松平村甚右衛門宛に出された検見引方についての申渡である。この「覚」を『田制考証』のまま注記を付して掲げると、次のごとくである（返り点は省略）。この「覚」を申し渡している山田四郎右衛門は郡奉行か代官であろうか。

覚

一當作御検見被成農引分御用捨之通めんめに御書付被下候、惣百姓へ配當可仕由百姓中間にて申候間、無理之由申付候へは、百姓縄其つもりと致候と残百姓衆へ被申候、是も尤候間、百姓縄相捨御検見帳之面は名付次第に御用捨引候へと申付候へは、惣百姓衆無残合點之事。

一先年天下御縄并佐竹殿よりの御縄を用（按、佐竹給人姓名に金沢与力五十石早川弥介あり、）早川弥介代官之時等分に取合、御年貢皆済さし錢諸公役迄に及三十ヶ年相勤候間、當年より百姓縄相捨弥介割付を用候物成皆済、さし錢諸役共に可仕之旨、惣百姓合點にて我等のかたへ尹物相渡候間、弥介わけ（ママ）付を用万可被申付之事。

（按に、寛永元年より三十ヶ年以前は、文禄四年に当たる、則石田検地の翌年也、）

一雅楽頭惣百姓衆と公事之儀雅楽頭まけ候間、御年貢之儀は不及申、さし錢諸公役共に郷中なみに、うたの頭にも可被申付事。

右之條々愈無甲乙様可被申付候、尤御検見引分之事は如件付（ママ）名付次第に引可被申候、若相背もの於有之者、急度曲事に可申付者也、仍如件。

寛永元年子霜月廿日

山田四郎右衛門（花押）

松平村甚右衛門殿江

よく理解できないところもあるが、1箇条目には、当年の検見引き方は百姓縄を廃止し、検見帳面に名を付け次第用捨引をするよう述べられ、2箇条目では、先年、天下御縄（＝石田検地＝太閤検地）と佐竹検地による検地帳を用い、代官早川弥介が等分に「取合」（組み合わせで、の意か）ってから年貢・指銭・諸公役等を30ヶ年勤めてきているので、当年から百姓縄を廃止し、弥介割付によって年貢・指銭・諸公役等を出すよう命じている、と理解される。最初に確認できる指銭の語は、そこにおける使用例であり、指銭の語は「年貢皆済さし錢諸公役」と年貢皆済の語の次に現出している。3箇条目の雅楽頭は前二箇条とどのように関わるのか明らかではないが、検見引きをめぐってであろう、

指銭の種類と負担をめぐって

惣百姓衆と争った雅楽頭に対し、公事に負けたのだから年貢は勿論指銭・公役を郷中並に支払わすように命じている。雅楽頭は、在地給人であれば年貢等の支払いは命じられないであろうから、郷侍・郷士的存在かと考えられる。

寛永元年11月「覚」には指銭の内容が記されているが、この「覚」によって指銭は近世的年貢徴収の始まりに重要な関わりがあることが理解される。以下に見られるごとく指銭の主な内容として年貢の運搬に関わる費用があることからすれば、指銭が年貢の次に並記されていることは、ここに記された指銭も年貢の運搬に関わる費用なのではないかと考えられる。また、3箇条目では雅楽頭は公事に負けたのだから年貢は勿論指銭・公役を郷中並に支払え、と命じている。指銭には以下に見られるごとく訴訟費用があることからすれば、敗訴した雅楽頭にその費用をも負担させようとしたとも考えられなくもないが、判然とはしない。

次いで指銭の語が見られるのは、寛文11年8月「覚」で、これは17箇条からなる郡方の定書だが、その13箇条目には「郷村指銭其帳面を委細ニ改、何様に遣候と致穿鑿、小百姓出候代物員数小百姓ニ為聞候て判形致、毎年手代ニ押切為致置可被申候、小百姓判形無之おゐてハ、庄屋組頭急度穿鑿可被仕事」とある。この箇条の背景には徴収した指銭の使途が明確ではなく、庄屋・組頭による不正も行われたのであろう。小百姓の判形を取るとともに指銭帳に不正がないことを承認する郡方手代の押切印をするよう命じている。元禄13年8月「定」（3箇条）の指銭についての箇条もその3箇条目は「郷指紙（銭デアロウ）其帳面委細改、何用ニ遣之候と致穿鑿、小百姓出候代物員数、小百姓為聞候致判形、毎年手代ニ押切為致置可申候、小百姓判形無之ニおゐてハ、庄屋組頭ヲ弥穿鑿可仕事」と寛文11年8月「覚」と同様な内容となっている。史料の配列から享保7年6月と考えられる郡方定書（2箇条）にはその1箇条目に「村々小割付指銭改等之儀ニ付、明暦四戊年中被 仰出候御條目有之處、近年ハ手代共取扱相弛、小百姓等傷候段相聞候之条、先年被 仰出候御條目を相守、精密改候様ニ、手代共ハ茂屹ト可申付事」とあって、明暦4年、村に課された年貢の小割付とともに指銭についても条目が公布されたとあるが、その条目は確認できなかった。この郡方定書も、指銭が不正の温床であるとともに小百姓疲弊の一因となっていることを示している。

指銭帳に郡方手代の押切印を押すようにしても、その監督が緩むこともあって村役人による不当な徴収は跡を絶たず、毎年徴収される指銭は農民困窮の一因にもなっていたからであろう。寛延3年6月には郡奉行から「指銭改様之事」が通達され、19箇条に渡り20種類以上の指銭についてその徴収の方法や注意を記している。その35年後、飢饉のため農作物も減収し、社会不安が増大した天明5年8月には18箇条の郡奉行達⁽⁸⁾が出され、その二箇条目には役人が風雨で御普請が行われなくても逗留した際とか検見立ち合いの際に、村役人が酒肴代を出銭と称して指銭とは関係ないように取り繕って酒肴を提供する村もあることを記し、そのような不正行為が「下ケ取」と称されていることが記されている。さらに七箇条目では寺社人相对勘化や御師、及び、瞽女・座頭の廻村や止宿においてもそのような不正が行われていることが記され、寛延3年の法令にその種類が明記されていないものもあって、「下ケ取」はやむを得ず行われているとも聞くが、「当巳年（天明5年、筆者）ハハいか様之筋なりとも其品微細ニ指銭帳へ相願し可申候」と命じている。

それでは、指銭にはどのような種類があるのであろうか。この節の最後に寛延3年6月「指銭改様之事」、及び、坂場流謙著の地方書『国用秘録』から指銭の種類について確認しておくこととしたい。寛延3年6月「指銭改様之事」はまだ公にされていない史料と考えられるので、やや長文だがその全文を掲げると次のごとくである。箇条には番号を付す。

指銭改様之事

- 一⁽¹⁾指銭改様の義只今迄宵年之帳面へ見合高下多候儀も無之候得共其通ニ見済、新ニ出候義ハ得ト吟味仕候故、村々にても兼而其旨相心得宵年之見合ヲ以帳面仕立改を受申候にて少々之過不足計にて本渡之指銭帳面ニ無之村方も在之、内證之不直相知不申候間、以来左之通吟味仕相改可申事
- 一⁽²⁾人足勘定之義只今迄ハ何れ之村方も指銭帳へ不出相済申候、畢竟百性其年切ニ取引相済候故指銭帳へハ願不申事ニ相見へ候得とも是又以来ハ人足勘定傳馬代ともに見届指銭帳へ合冊仕改可申候、人足勘定見届不申候故内證にてハ指引之未熟も数多有之様相聞候間吟味可仕事
但 人足勘定無之村方も在之得ト次第相糺可申事
- 一⁽³⁾諸役人衆泊り一夜百文宛之定之村も在之、又ハ百文之外薪など定法を以取候村も相見へ其外入用之品々村中々持寄一夜五拾文位にて相済候も有之、且指銭一向相掛ケ不申庄屋賄之内にて賄候村方も有之候、諸役人衆泊り小拂手形庄屋方へ請取賄候得ハ一夜百文宛之入目過分ニハ香之物共ニ一汁二菜之賄作り之物を以仕出候 下略(ママ)
- 一⁽⁴⁾御年貢之外江戸米掛・大豆掛・柿渋代・竹箒・草箒万納もの代鑑受取候分以来ハ指出し元鑑高之員数銘々帳面へ為記改候節可為指出候
但 右納物代之儀ハ御代官かた収納帳へ為引合改可申候
- 一⁽⁵⁾人足日雇銭割物にて取立候分元鑑高為記可申事
- 一⁽⁶⁾公儀御城米駄賃銭問屋々受取候分村へ割候儀弥村へ相渡候哉帳面見届可申事
- 一⁽⁷⁾江戸御用御薪付人馬御扶持大山守仕出を以相渡候処、庄屋々小人ニ相渡候證拠見届候様可致事
- 一⁽⁸⁾江戸御用御米付駄賃銭御蔵方々庄屋請取小人へ相渡候処小人銘々受取候證拠見届候様可致事
- 一⁽⁹⁾江戸御用御炭付御扶持右同断事
- 一⁽¹⁰⁾納竹之儀村々々竹藪主半分出し半分ハ村中償ニ相掛ケ村分も有之候、納竹代取立之儀、竹藪主々取立候分償候分ともに村々にて割取候員数銘々帳面へ為記可申候、只今迄ハ指銭帳へ仕出不申旨竹代庄屋引負ニ相成候村々在之候間、以来帳面へ為仕出竹代拂候證拠書付を以見済可申事
- 一⁽¹¹⁾御鷹掛り衆餌指泊り候村方宿仕候ハ、仕出見届證據ニ仕改可申、且御鳥見方餌指泊り之儀ハ米代拂候間村指銭之内□仕出可申事
- 一⁽¹²⁾餌指泊り之節何月何日より幾日まてと書付證據判取置指銭改之節為指出可申事
- 一⁽¹³⁾人足御扶持方銘々割渡帳為致置見届可申、尤村々々御扶持方不埒相場を以拂ニ相立指銭内

指銭の種類と負担をめぐって

にて引候村方も有之候、此儀ハ村定にても申事ニハ候得共拂方之次第得ト見届可申事

- 一⁽¹⁴⁾御城米納掛並出目石代割返候儀是又銘々帳面へ為仕出見届可申事
- 一⁽¹⁵⁾村々役人御用にて両役所其外所々へ罷出候節宿賃之外ニ小遣銭村方より百五拾文位之所も在之、又ハ弍百文或ハ其余之定ニ而取来候村方も在之候、此儀ハ村々遠近ニもより可申候得とも此上得ト遂吟味一日の昼食代 下略(ママ)
- 一⁽¹⁶⁾村役人近郷へ御用罷出候節只今迄ハ道之遠近ニ無構傳馬ニ而罷越其上人馬共ニ小遣銭等指銭割出候村方も有之候、遠方へ罷越候義ハ格別之事ニ候得共半道或ハ一二里位之所ハ步行ニ而罷越し御用之次第ニ々から夫々召連候儀ハ相済可申候
- 一⁽¹⁷⁾小検見指銭之儀ハ猶更之義村役人寄合之入目惣而指銭不依何品ニ村々取立候分ハ委帳面ニ為仕出改可申候、ころばし指と申其時々ニ取集指銭へ仕出不申村方も有之由、ケ様之村方屹ト申付左様之儀無之指銭へ仕出候様可申付事
- 一⁽¹⁸⁾村々役人近郷之諸御用ニ罷出候節ハ小遣銭之儀庄屋・与頭とも役料取罷在候間遣銭自分物入にて可勤候様ニも可被仰付候

但 近村へ御用ニ罷越候儀皆済御用等又ハ村掛合などの類にて相詰候節ハ無據分委細に記し為仕出指銭へ組入可申候、且掛合等之入目ハ前振之通り指銭ニ仕間敷候事

- 一⁽¹⁹⁾諸納方ハ勿論万指銭不依何品年中取立候分百性人切通帳為仕立金鑑請取候時々月日相記地組頭押切判致置右ヶ年切ニ通帳指銭改之節可為指出候事 下略(ママ)

寛延三年午六月

御郡奉行

先ず一箇条目において、指銭の額は前年度の額と大きく変わらないので、指銭帳を昨年度の額と釣り合いを取りながら作成し、改をうける村もあるが、それでは不正もわからなくなるので、以後、この通達にあるよう吟味して指銭帳を作成するようと言うことが、二箇条目では、人足勘定は今迄何れの村も指銭帳へ記載しないで済ませてきたが、今後は人足勘定・伝馬代ともに記載するよう、と全体に渡ることが命じられ、最後の十九箇条目では、指銭も諸納方同様百姓個人別に通帳を作成して金銭受取の月日を記し、地組頭の押切判を押し、その通帳は一年ごとに指銭改めの際指し出すようにと命じて括られている。

指銭を村民に懸けないで庄屋賄いで支出する村もあること(3箇条目)、「ころばし指」と言ってその時々に取り集めるが、指銭として計上しない場合もあること(17箇条目)等も上記の通達から理解されるが、以下、この通達によって指銭の種類について見るとどうであろうか。

使途によって分けようとする、人足勘定や村役人諸経費等その内容が不分明なものもあるが、寛延3年6月の通達に従って見ると、指銭は大凡6つに分けられるようである。その大凡の分類と個々の指銭乃至指銭が充当する費目から整理すると以下のごとくである。指銭の費目について、寛延3年6月の通達の箇条の番号を併せて記す。

- イ. 年貢米、小物成・浮役の運搬費： 御城米納掛(第14条)・江戸米掛(第4条)・大豆掛(第4条)・公儀御城米駄賃銭(第6条)・江戸御用薪付人馬扶持(第7条)・江戸御用米付駄賃銭(第

8条）・江戸御用炭付扶持（第9条）。

ロ．小物成・浮役：柿渋（第4条）・竹箒（第4条）・草箒（第4条）・納竹（第10条）。

ハ．人足経費：人足日雇銭（第5条）・人足扶持（第13条）・伝馬代（第2・16条）。

ニ．小検見指銭（第17条）。

ホ．諸役人宿泊代：諸役人衆宿泊代（第3条）・御鷹掛り衆餌指宿泊代（第11条）・御鳥見方餌指宿泊代（第11条）。

ヘ．村役人公用諸経費：村役人御用宿泊費・小遣銭・昼食代（第15条）・村役人近郷路用（第16条）・村役人近郷御用小遣銭（第18条）。

坂場流謙の『国用秘録』では、江戸米掛り銭・大豆掛掛り銭をそれぞれの項目で江戸への年貢米や大豆の運搬費として説明しているが、同書の「松岡御領分百七拾三ヶ村分指銭惣括之事」では江戸米掛銭を竹草箒代・鳥運上とともに小物成としている⁹⁾。ここでは江戸米掛・大豆掛を本来の運搬費として整理する。

以上の寛延3年6月の通達における指銭の種類を見ると、小物成・浮役の類の年貢そのものを含みながら、イ．年貢米、小物成・浮役の運搬費からへ、村役人公用諸経費に至るまで、領主側の法令に言う指銭とは、年貢の補完物であったり、村請の年貢諸役を実現するための経費といえることができるのではなかろうか。現実の指銭は多様であり、村民の社会生活や生産などの共同機能に拘わる経費も含まれるが、19箇条の多くからなっているにも拘わらず、寛延3年6月の通達にはそのような経費はまったく認められないのである。しかし、天明5年8月の郡奉行達では「寛延三午年被仰出候御法ハ其品ニ限有之」と寛延3年6月の通達を意識しつつ、既述のごとく「当巳年（天明5年、筆者）ハいか様之筋なりとも其品微細ニ指銭帳へ相頭し可申候」と命じている。指銭の細部に渡る指銭帳への記載が命じられているのであり、領主側の法令における指銭と村側の現実の指銭との乖離がなくなり、法令において村民の社会生活や生産などの共同組織に拘わる経費などが正式な指銭として意識されてくるのは天明5年8月の郡奉行達であったのではないかと考えられる。

最後に地方書の『国用秘録』ではどのようなものが指銭として掲げられているかを「松岡御領分百七拾三ヶ村分指銭惣括之事」によって見ると、次のごとくである。

諸役人止宿賄代、御城米水戸御藏へ納掛り銭・大豆納掛り・稗納掛り、鳥運上村役人共水戸役所へ出ル泊り銭・晝食代、諸役人昼食代、定使給、御城米橋掛銭、神社勧化銭、堰普請人足・溜池拂人足・道繕人足、奥大名衆宿次の村々寄人馬・法事御用在國等にて働く諸人馬、相樂寄、等々。

寛延3年6月「指銭改様之事」（第5・13条）における人足は年貢運搬に関わる人足という意味合いが強いように思われるが、文化年間後半に完成した坂場流謙著の地方書『国用秘録』の指銭では、溜池・道繕等の普請人足があるほか、定使給、神社勧化銭、相（法カ）樂寄（法楽のための寄り合いカ）等の村政運営面や村民の生活・生産に拘わる経費のあることが、寛延3年6月の通達と大きく異なっている。

2 指銭帳に見る指銭とその負担

残存指銭帳の概要 それでは実際の指銭帳に指銭を見るとどうであろうか。指銭の語が確認された最も古い例は寛永元年11月の「覚」であった。茨城県立歴史館所蔵の須田家文書中に残されている指銭帳はその25年後の慶安2年以降のものだが、残されている指銭帳は慶安2年以降貞享5年に至る26冊である。うち1冊は表紙のみであり、もう1冊は表紙欠の指銭帳だが、両帳は記載された庄屋の名前が異なるなど別々の指銭帳である。それら26冊の指銭帳（形態は横帳）は「慶安年中
貞享年中迄 須田源之丞□（印）」と記された表紙が懸けられて一括して綴じられている。かなり分厚くなっており、そのため指銭帳の右肩が読めない部分もあるが、残された指銭帳は指銭乃至村入用帳としては近世の早期のものである。

永山・牛堀両村は1名の庄屋によって治められたため、指銭帳は両村を併せて記載された帳が作成されているが、先ず、その26冊について年代順（綴じられた順）に表題、役高、指銭のメ高、記載方式等を整理すると、第1表のごとくである。紙面の都合上表示することはできなかったが、両村の庄屋は承応3年から貞享5年迄代々須田本家で勤めている。表題を見ると、慶安2年から承応3年迄がその末尾は「万指帳」、明暦元年が「指銭帳」、万治2・3両年が「万入目さし銭帳」、そして寛文4年以降は「万指銭請取払帳」・「万指銭帳」・「万指銭請取払方帳」という表題が混在している。役高とは村高から庄屋分・御蔵屋敷等を引いた指銭を賦課する高のことで、万治2・3両年の帳上の表現を使用した。寛永18年検地帳の両村の村高合計は842.661石（永山村606.777石、牛堀村235.884石）であるから、引かれた庄屋分・御蔵屋敷等を加算してその村高と合致するのは、寛文4年から寛文11年及び表紙欠の8冊の帳だけなので、役高は検見等によって若干増減する場合があるものと思われる。また、これも第1表では略したが、寛文11年8月「覚」以降不正防止のため度々命ぜられている郡奉行手代による押切印について見ると、慶安2年の指銭帳表紙に三室兵右衛門代宮長兵衛の押切印があるのを始め、貞享5年に至る指銭帳のすべてにそれを見ることができる。表紙に記載された年月日から、指銭帳が作成される時期を見ると、延宝7年までは10～12月が多く、延宝7年以降では正月に作成されている場合が多いという傾向が認められる。中には前年に仕立てられている帳もある。押切印が押され帳の改められた年月日について、表紙の年月日と比べると（つまり指銭帳が仕立てられた年月日が）、確認できる13例のうち1年後・2年後・3年後に改めを受けていると思われるのは各4例、4年後が1例である。指銭帳の記入が終わった時点からの年数は実際には短くなるものもあるが、寛文6・7年の帳は寛文9年、延宝8～天和3年迄の4冊は貞享元年、貞享4・5年の3冊は元禄3年に改めを受けており、延宝8年の帳ではその改は4年もの後となっている。改めはすべての帳に実施されているが、帳作成と同時に厳密に実施されていたとは言い難いようである。

記載形式 各帳の記載形式を見ると、最も古い慶安2年の帳では最初に万帳カミ・あふら・はたこ（カ）代の指銭合計410文の組別（6組）分担額、次いで橙282文の組別（6組）分担額、次いで橙72文の組別（2組）分担額、次いで万帳カミ以下計136文の組別（2組）分担額、の順に記載されており、慶安3年の帳では見出しに「寅ノ指之覚」という表題があってその後に組頭合力分・定夫銭・郷中指・

第1表 年次別指銭役高・メ高・記載形式

(表紙)年・月・日	表 題	役 高	指 銭 メ 高	記 載 形 式
慶安 2 年11月10日	長山村牛堀共ニ丑万指帳		(鑑900文)	メ高のあと費目別組割
慶安 3 年10月15日	永山村寅ノ年分万指帳		金 1 分695文	メ高のあと組割
承応 3 年12月20日	牛堀永山午ノ年分万指帳		3 貫115文ほか伊勢御祓銭 525文・定夫金 2 分320文	メ高のあと組割
明暦元年11月23日	牛堀村内未之指銭帳 (表紙のみ残存)			
明暦 3 年	(酉ノ万さし)		963文	メ高のあと組割
万治 2 年正月吉日	牛堀村長山共ニ亥之年 万入目さし銭帳	838.949石ほか庄屋28.734石・御蔵 屋敷(石高無記入)	3 貫202文 (高 1 石に付、 3 文 6 分 6 厘 5 毛)	メ高のあと個人別 (151名) 高割
万治 3 年正月 6 日	牛堀村同永山共ニ万入目 さし銭帳	838.949石 (同前)	4 貫180文 (高 1 石に付、 4 文 7 分 8 厘 7 毛)	同前個人別 (151名) 高割
(表紙・前欠)		808.283石 842.661石-34.378石 (御蔵屋敷・庄屋高引)	1 貫 35文 (高 1 石に付、 1 文 2 分 8 厘)	同前個人別 (破損部あり?) 名) 高割
寛文 4 年 8 月 1 日	牛堀村辰年万指銭 請取払帳	808.283石 (同前)	1 貫350文 (高 1 石に付、 1 文 6 分 7 厘)	同前個人別 (157名) 高割
寛文 5 年10月21日	牛堀村巳之年万指銭 請取払帳	808.283石 (同前)	1 貫238文 (高 1 石に付、 1 文 5 分 3 厘)	同前個人別 (162名) 高割
寛文 6 年12月 9 日	牛堀永山村午ノ万指シ銭帳	808.283石 (同前)	2 貫313文 (高 1 石に付、 2 文 8 分 6 厘)	同前個人別 (164名) 高割
寛文 7 年 2 月15日	牛堀村未之万指銭帳	808.283石 (同前)	3 貫291文 (高 1 石に付、 4 文 8 厘)	同前個人別 (161名) 高割
寛文10年11月15日	牛堀村長山共戎ノ万 指銭請取払帳	808.283石 (同前)	6 貫443文 (高 1 石に付、 7 文 9 分 6 毛)	同前個人別 (168名) 高割
寛文11年11月18日	牛堀村長山 [] 亥ノ 指銭帳	818.467石 842.661石-24.194石 (御蔵屋敷・庄屋高引)	5 貫402文 (高 1 石に付、 [])	同前個人別 (173名) 高割
寛文11年12月13日	牛堀村子ノ万指銭 請取払帳	817.304石 842.661石-25.357石 (御蔵屋敷・庄屋高引)	1 貫168文 (高 1 石に付、 1 文 4 分 2 厘 9 毛)	同前個人別 (181名) 高割
延宝 5 年11月15日	牛堀村長山共ニ午 万指銭請取払帳	817.747石 843.567石-25.820石 (御蔵屋敷・池代・庄屋高引)	1 貫328文 (高 1 石に付、 1 文 5 分 6 厘)	同前個人別 (176名) 高割
延宝 7 年正月15日	牛堀村長山共未 万指銭請取払帳	817.747石 (同前)	2 貫123文 (高 1 石に付、 2 文 4 分 9 厘 3 毛)	同前個人別 (165名) 高割
延宝 8 年正月	牛堀村申年万差銭 請取払方帳	817.530石 843.567石-26.037石 (御蔵屋敷・池代・庄屋高引)	2 貫927文 (高 1 石に付、 3 文 4 分 3 厘 8 毛)	同前個人別 (172名) 高割
延宝 9 年正月	牛堀村永山共ニ酉年分 万指銭請取払方帳	817.530石 843.567石-27.449石 (御蔵屋敷・川欠・池代・庄屋高引)	1 貫883文 (高 1 石に付、 2 文 2 分 2 厘)	同前個人別 (178名) 高割
天和 2 年正月	牛堀村永山共戎年分 万指銭請取払帳	815.338石 843.567石-28.229石 (御蔵屋敷・川欠・池代・庄屋高引)	2 貫707文 (高 1 石に付、 3 文 1 分 9 厘)	同前個人別 (178名) 高割
天和 3 年正月	牛堀村永山共亥年分 万指銭請取払方帳	815.338石 (同前)	1 貫972文 (高 1 石に付、 2 文 3 分 2 厘 1 毛)	同前個人別 (176名) 高割
天和 4 年正月	牛堀村永山共子之年分 万差銭請取払方帳	815.338石 (同前)	2 貫718文 (高 1 石に付、 3 文 2 分)	同前個人別 (176名) 高割
貞享元年11月	牛堀村長山共ニ丑ノ年中 万指銭帳	815.338石 (同前)	3 貫66文 (高 1 石に付、 3 文 6 分 1 厘 3 毛)	同前個人別 (175名) 高割
貞享 3 年正月	牛堀村永山共寅之年 中万指銭帳	815.178石 843.567石-28.389石 (御蔵屋敷・川欠・池代・庄屋高引)	2 貫793文 (高 1 石に付、 3 文 2 分 9 厘)	同前個人別 (179名) 高割
貞享 4 年正月	牛堀村永山共卯万指銭 請取払方帳	815.178石 (同前)	2 貫854文 (高 1 石に付、 3 文 3 分 6 厘)	同前個人別 (177名) 高割
貞享 4 年10月	牛堀村永山共辰万指銭 請取払方帳	814.067石 (ママ) 843.567石-29.05石 (御蔵屋敷・川欠・池代・庄屋高引)	4 貫175文 (高 1 石に付、 4 文 9 分 2 厘 3 毛)	同前個人別 (174名) 高割
貞享 5 年 7 月	牛堀村永山共巳万指銭 請取払方帳	813.684石 843.567石-29.883石 (御蔵屋敷・川欠・池代・庄屋高引)	3 貫592文 (高 1 石に付、 4 文 2 分 4 厘)	同前個人別 (174名) 高割

(注) 1. 明暦 3 年については「須田蔵書二之巻」所載の「明暦三年酉ノ万さし」による。

2. 「役高」の語は、万治 2 年と同 3 年の指銭帳に 1 石当たりの指銭が賦課された石高を「役高」と記していることによる。

指銭の種類と負担をめぐって

組中指それぞれの額とその合計1分695文が記され、「ハけ」としてその後に13名（組カ）分の組頭合力分・定夫銭・郷中指・組中指の分担金とその合計金額が記載されている。承応3年の帳は前2例と異なり「水戸上りせん」・「江戸御屋敷肴持参候飛脚せん」等10のその年に掛かった指銭の使途・費目とともにその額の記載があり、その合計3貫115文の文字の後に「此代組割付さし」として牛堀2組分と永山村であろう6つの組の分担額が記され、さらにその後に伊勢の御祓銭と定夫銭の組割付指額が記載されている。第1表には別の史料から明暦3年の指銭帳の内容も加えておいたが⁽¹⁰⁾、この帳も小検見時の入費ほか9の指銭の用途・費目を記した後、その合計963文が7つの組と別当・牛堀分に割付られている。

以上に対して万治2年以降の指銭帳を見ると、それ以前の帳と記載形式が異なっている。最初に指銭の使途・費目やその合計額を記すことは承応3年・万治3年の帳と同じであるが、万治2年以降の帳では費目別の指銭の合計の後に「右之わけ」等として個人別にその持高割負担額を記すという記載形式に変化している。帳の厚さも明暦元年までが上紙共に3枚程度であるものから、万治2年以降では上紙共に10枚から18枚の厚さとなっている。この丁数の増加は単に記載形式の変化と言うだけではなく、指銭の負担・賦課方式の変化を反映するものと考えられる。

記載の変化自体は承応3年の帳から認められ、その変化はそれ以前の帳には帳紙・油・はたこ（カ）・橙・定夫銭しか費目がなかったものが、承応3年以降では指銭の使途・費目の多様化として現れている。承応3年の帳における指銭の使途・費目は水戸上り銭・江戸屋敷肴持参飛脚銭・宗旨改帳紙代・水戸飛脚銭・座頭合力銭・板久村行き遣銭・庄屋帳紙等であるが、この年以降指銭の使途・費目は多様化している。それではこれ以降貞享5年に至る指銭にはどのような指銭があるのであろうか。指銭の負担・賦課方式の変化については後に見ることとして、次に指銭の種類・費目について見ることとする。

指銭の種類 指銭の種類については既に寛延3年6月「指銭改様之事」によって示したが、承応3年以降貞享5年に至る22年間分の残存指銭帳の使途・費目を整理し、額の多い順に整理すると以下のごとくである。表紙・前欠の帳は費目全体の記載も欠いているため以下では削除する。

a. 村役人公用諸経費	計30,842文 [48%]	イ. 水戸登り遣銭	(71) 24,144文
		ロ. 板久行き遣銭	(12) 1,394文
		ハ. 玉造行き遣銭	(2) 169文
		ニ. その他	(13) 5,135文
b. 共同生活・生産に関わる費用		ホ. 訴訟費用	(20) 12,561文
	計14,149文 [22%]	ヘ. 雨乞料	(2) 1,588文
c. 物品購入費	計 7,924文 [12%]	ト. 万御用帳紙	(26) 7,205文
		チ. その他	(3) 719文
d. 小物成・浮役	計 7,078文 [11%]	リ. 鷹餌犬	(7) 6,747文
		ヌ. 正月御飾御用橙	(12) 331文

e. 飛脚銭	計 1,740文 [3%]	ル. 飛脚銭	(4) 1,740文
f. 村役人等飲食費	計 1,468文 [2%]	ヲ. 村役人等飲食費	(6) 1,468文
g. 役人諸経費	計 802文 [1%]	ワ. 役人諸経費	(4) 802文
h. 小物成・浮役運搬費	計 633文 [1%]	カ. 矢野竹	(1) 548文
		ヨ. 納箒	(1) 85文
総 計		費目件数	(184) 64,636文 [100%]

各指銭帳記載の指銭メを合計すると64貫803文となる。実際の合計では167文ほど少なくなるが、全体の傾向は窺うことができるものと思われる。以上の整理の（ ）内の数字は指銭帳上に計上された件数である。

指銭の種類別総額は、村役人公用諸経費、共同生活・生産に関わる費用、物品購入費、小物成・浮役、飛脚銭、村役人等飲食費、役人諸経費、小物成・浮役運搬費の順となっている。村役人公用諸経費総額は22年間分の指銭総額の48%を占めているが、その内容は割付受取、金納・代方納め、新開水帳等諸帳簿受取や提出、烏運上金上、餌指札提出、大番御礼、交替役人への挨拶等々の公用で水戸が最も多いが、他所へ出張する際の遣銭（含む、旅籠・飯代・馬代）で、その他、割付勘定、江戸路用、帳簿書人扶持、欠落人穿鑿出張の費用、鹿狩りの際の宿賃や座頭合力銭がある。水戸登りには水戸藩南領の他村の者が行く場合もあるが、その費用も支払われている。共同生活・生産に関わる費用は全体の22%を占めるが、その内容は訴訟費用と雨乞料で、これは別項にしたほうがよいのかも知れないが、共同生活・生産を広い意味でとった。村民の生活・生産に関わる経費は、寛延3年6月「指銭改様之事」では指銭として認められていない費目であるが、訴訟費用と雨乞料は指銭総額に占める割合が高いにも拘わらず法令では指銭として認識されてはいない。訴訟費用と雨乞料では圧倒的に訴訟費用のほうが額は多いが、訴訟の内容としては、水いかり・夫食・新嶋領との公事・拝借金・小検見・不作・検見等がある。物品購入費は全体の12%を占める。その多くは万御用帳紙であるが、その他守随の秤・樽・油等がある。小物成・浮役の額は全体の11%で、その内容は鷹餌犬と正月御節御用橙であるが、小物成・浮役運搬費の内容は犬や橙の運搬費用ではなく、矢野竹・納め箒の運搬費用である。飛脚銭以下の全体に占める割合は何れも3%以下となっているが、飛脚銭は水戸や江戸との飛脚銭のほか他村立て替えの飛脚銭で、村役人飲食費としたものは小検見・初米積・金納・宗旨改・役人出張等の公用の際掛かった飲食費で、飲食費は他所へ出張する際の遣銭の中にも含まれるであろうが、ここには酒代・豆腐代・白米代等と明確に飲食費だけを示す費目を整理した。小検見については小検見指銭という言葉もあるが⁽¹¹⁾、ここにはその際の飲食費のみが記されているということである。役人諸経費とは水検分衆・代官・国廻り等の役人が出張してきた際の遣銭で、あるいはこれは村役人諸経費に入れたほうがよいのかも知れない。

なお、万治2年以降の指銭帳には御蔵屋敷・庄屋給や池・川欠代の語が見られるが、それらの高には指銭が賦課されないように村高から削除されている。

以上指銭帳により指銭の種類について大雑把にはあるが、見てきた。

指銭の種類と負担をめぐって

慶安2年の指銭帳の費目は万帳紙・油・はたこ(カ)・橙等のみで、慶安3年の指銭帳では費目として確認できるものは定夫銭のみであるが、当然村費はそれのみではないであろう。あるいはこの時期には指銭＝村費という概念がまだ明確になっていなかったことも考えられるが、費目の記載が多様になる承応3年以降の指銭帳においても村内における割付勘定・小割付・定夫・諸帳書人の費用、小物成・浮役やその運搬費等毎年の指銭帳に記載があっても不思議ではないような費目もすべての指銭帳に記載されているとは限らない。また、寛延3年6月「指銭改様之事」との大きな相違として、小物成・浮役の運搬費はあるが、指銭帳には年貢米のそれがまったく見当たらないということがある。このようなことから村費に当たる費用は実際には指銭帳以

外にも存在していたことが考えられる。これは指銭の負担方法がどうなっているのかということとも関わってくるが、指銭をめぐる騒動は、その不明確さにも一因があったのではなかろうか。

文化年間完成の郡方役人坂場流謙著の地方書『国用秘録』における指銭との相違から、寛延3年6月「指銭改様之事」では村政運営面や村民の生活・生産に関わる経費が指銭として認識されていないことを指摘したが、残存指銭帳との関連で言っても、訴訟や雨乞等の費用も多額であるにも拘わらず指銭として認められていないことは同じである。現実の指銭と法令における指銭とは乖離しているのであるが、その乖離は指銭を年貢諸役の村請を補完するものとして考える領主側と共同組織としての村の必要経費をも考えなければならない村側との相違からくるのであろう。しかし、村政運営面や村民の生活・生産に関わる経費の指銭帳という公式帳簿の上での公認は、村という共同組織の持っている機能を領主側が認めざるを得なかった結果なのではないかと考えられる。貞享5年以降の指銭について検討するゆとりが今はないが、半世紀後の元文元年以降における各年の指銭ノ高を掲げると第2表のごとくである⁽¹²⁾。半世紀後の元文元年以降近世後期の享和元年では、貞享5年の指銭合計を4貫としてもその額は20～40倍以上となっている。指銭がそのように顕著な増大を見た原因として、年貢諸役の村請費用の増大や細分化、及び、村民の生活・生産、つまり村の共同組織としての必要経費の多様化や増加があるのではないか、と推測されるのである。

指銭の負担方法 残存する指銭帳の記載形式は、承応3年から費目の多様化が認められたが、明暦3年までは各年の指銭合計は組割の記載となっていること。万治2年以降は各年の指銭合計の後に個人別にその持高に応じた負担額を記すという記載形式に変化していることを指摘した。その間明暦4年には指銭についての法令が公布されていることを考えると、その法令の背景には、指銭の負担方法が組を通さず個々の農民の持高に応じて負担するいわゆる高割方式を可能とする村内の変化があったのではないと思われる。

指銭が組割の負担方法となっている明暦3年までの4冊の指銭帳によると、永山・牛堀両村の組は

第2表 指銭ノ高之覚(元文～享和)

年次	指銭ノ高
元文元年	銭 81貫976文
寛保元年	銭 97貫421文
延享元年	銭 93貫617文
宝暦元年	銭 81貫417文
明和元年	銭106貫394文
安永元年	銭112貫568文
天明元年	銭124貫 51文
寛政元年	銭160貫918文
享和元年	銭178貫923文

注 「須田蔵書二之巻」所収史料による。

慶安2年が永山村6組・牛堀村2組、承応3年が同じく6組と2組であるが、慶安3年と明暦3年では村の区別が不明で、前者では13名に分けられてそれぞれの負担額が記入され、後者では7組のほか別当と牛堀分の負担額がある。人名（家号）が継続してないこともあって、永山・牛堀両村の組の実態についてはいまだ明らかにしていないが⁽¹³⁾、永山村の正保3年8月「戌之御年貢納割付帳」（写）、及び、牛堀村の同年11月「戌ノ御割付之面」（写）⁽¹⁴⁾によると、前者では6組と牛堀分・源之丞に年貢が賦課され、後者では2組のほか永山分等に年貢が賦課されている。慶安3年の指銭帳では13名に分けられて負担額が記入されており、1名を除く12名はすべて組頭合力分を負担しているから、両村で12の組があったと考えられるが、4年の隔たりしかない年貢納割付帳の両村組数と一致しないなど両村の組の実態は不明である。

慶安3年の指銭帳については他の指銭帳と同様費目別に指銭が記された帳として扱ってきたが、そこに記された費目に当たるものは定夫銭のみで、他は組頭合力分・郷中さし・組中さしとなっており、同帳にはそれらの13名別の負担額が記されている。1名を除く12名がすべて組頭合力分を負担していることから13名を一応組頭と捉えたが、定夫銭は一律38文ずつ12組の負担となっており（定夫銭は「きもいり」とも記されている）、組中指は一律8文ずつ13組の負担となっている。その他、組頭合力分は250文が1組、180文が1組、56文が8組、27文が2組であり、郷中さしは6文が4組、5文が3組、2文が2組等区々である。指銭の賦課には各組に指銭総額を割り付ける方法のほか、この帳によって組頭合力・郷中指・組中指等の賦課方式によって負担する方法のあったことが理解される。12ないしそれ以上という通常より多いと考えられる組はこのような賦課方式による場合に組織される組とも考えられるが、明らかではない。永山村の正保3年8月「戌之御年貢納割付帳」（写）の奥書には「組頭百姓共ニ立合相談を以御割付之面算用わり付仕候」とある。指銭も「組頭百姓共ニ立合相談を以」その徴収を図ったものと考えられる。

万治2年以降の指銭帳では指銭の負担は組頭を媒介することなく、個々の農民の持高に応じて賦課するいわゆる高割方式に変化している。その1石当たりの賦課額は、万治2年以降貞享5年に至る21帳を平均すると3文1分9厘3毛となる。1石当たりの最高賦課額は寛文10年で7文9分6毛だが、延宝5年までは1石当たり1文台の年も多く、それ以降は2～4文台となっており、17世紀の終わりに近づくにつれてその額は少々増加している。

各年代の負担者数は両村併せて151名から179名となっている。両村の貞享4年8月「牛堀村永山共人別改帳」⁽¹⁵⁾によると、両村の戸数は牛堀村52戸・永山村96戸で、合計148戸となるから指銭の負担者数は少し多過ぎるように思われる。指銭帳では村別に個々の負担額と百姓名が記載されていないこともあって、個々の記載農民がいつれの村に帰属するかの判明を困難にしているが、指銭負担者数が両村の百姓数より多い一因として永山村からの牛堀村への入作、またその逆の入作、及び、両村以外からの入作者も両村の指銭を負担していたことが考えられよう。

貞享4年の永山村人別改帳には7戸の家風が存在するが、無高の水呑の指銭負担が認められないのに対し、7戸の家風はすべて同年の指銭の負担者となっている。そのうち3名の名前は延宝5年の指銭帳までさかのぼることができる。永山村ではその家風の祖と考えられる農民が寛永検地に際し、屋

指銭の種類と負担をめぐる

敷地は分付で名請けしているが⁽¹⁶⁾、多いものでは耕地を1町前後有する名請人として自立していることから、彼等は寛永検地以降には指銭の負担者となっていたのではないかと推測される。

指銭の負担が高割となっている帳の記載形式は、先ず最初に指銭の額やその使途・費目が記され、その合計の後に個人別に負担額が記されているが、指銭の額や使途・費目を記した箇所の下段には人名が記されている。その位置のすべてに人名が記されているわけではないが、寛文10年以降の帳では指銭の額や使途・費目を記した下段にはほとんど人名が記されている。「一代五百文 是ハ戊正月人馬帳水戸へ納申候時分人馬三人ニ而水戸ニ而二夜紅葉昼はたこ共遣申候 源之丞」・「一代三百三拾弍文 是ハ戊ノ二月御拝借金水戸へ御訴訟ニ登申候遣銭 辻村二郎右衛門」のごとくである。その他人名の記し方を見ると、「庄屋源之丞 馬方市三郎」・「助之丞ニ渡ス」等々の例がある。庄屋源之丞の場合はその費用を立て替えるであろうが、馬方市三郎が立て替えることは考えにくい。「渡ス」という表現もあることからしてそこに記された人名は基本的にはその指銭を使って公用を担当した者の名前であろうと考えられる。

指銭の徴収はその費用で賄われる公用が済んだ後になされるので、とすると指銭が誰によって立て替えられていたのかという疑問も生ずる。寛延3年6月「指銭改様之事」に「指銭一向掛掛ケ不申庄屋賄之内にて賄候村方も有之候」という文言があるように、指銭を村民に掛けず村費が庄屋賄いによって運営される村があることから推せば、指銭を立て替えているのは庄屋であろうと考えられる。指銭帳の個々人の指銭負担額を記している箇所に庄屋の名前は見当たらない。これは庄屋賄いということと関連するのではないかと思われる。指銭帳には記載されていない指銭もかなりあるのではないかと推測したが、それらは庄屋賄いによって補完されていたのではなかろうか。それ故指銭帳には見えない部分で村費をめぐる騒動が発生することも多かったのではないかと考えられるのである。

おわりに

法令類・地方書と須田家文書中に残存する慶安2年以降貞享5年に至る26冊の指銭帳を通じて、指銭について検討してきた。指銭の語は寛永元年には認められるが、「御年貢皆済・さし銭・諸公役」と出てくることから、年貢輸送に関わる費用ということが推測されても、その内容は明確ではなかった。指銭の内容・種類が確認できるのは慶安2年の指銭帳においてであったが、その翌年の指銭帳と併せても確認できた指銭は万帳紙・油・旅籠(カ)・橙代・定夫銭の5種の費目だけである。指銭の費目は承応3年以降多様化する。領主側は諍いの起こらぬよう指銭の使途を指銭帳に委しく記載すること等を度々通達しているが、領主側の認識している指銭と村側で実際に運用されている指銭とでは必ずしも一致しておらず、両者の間には乖離が認められた。その乖離は寛延3年6月「指銭改様之事」に指銭帳には現れる訴訟費用をはじめ生活や生産など村の共同組織に関わる指銭がまったくないことに現れていた。村が生活や生産の共同組織を有し、そこにおいても経費が必要であることを指銭帳という帳簿では認めながら、生活や生産の共同組織に必要な経費は法令の上では把握されていないのである。天明5年8月、寛延3年6月「指銭改様之事」を踏まえつつどのようなものでも委しく指銭帳

に記すよう改めて通達しているが、村の生活や生産における必要経費が正式な指銭として意識されてくるのはこの通達によってではないかと考えられた。

指銭がどのように負担あるいは賦課されていたかについては、指銭帳の記載形式によって示されていた。村内構成の発展に基づく指銭の負担そして賦課の方法の変化が指銭帳の記載形式の変化をもたらしたと言ってもよいであろう。その記載形式の変化は万治2年の指銭帳から認められ、その年以降指銭は個々人の負担となり、個々人の持高に応じて賦課されるようになる。万治2年は指銭の多様化が認められた承応3年から6年後に当たっているが、指銭の多様化も指銭の負担方法に変化をもたらした村内構成の変化が指銭の明瞭化をもたらした結果なのではなかろうか。村民個々人に賦課される以前は組が指銭割付の単位となっていた。それは近世的な小農民の経営がまだ安定せず、同族团的結合が強いと考えられる組からの小農民の自立度も低く、そのため組の頭が中心となった徴収方法が採られていたと考えられる。指銭賦課の組単位から農民個々人の高割方式への変化は、近世的な小農民の経営の安定化が基因となっていたとすることができるのではなかろうか。

指銭帳の指銭の使途・費目を見ると、指銭帳に記された以外にも村政運営費は掛かっていたように考えられる。にもかかわらず村政運営が可能であったのは、近世初期においては庄屋賄いによる部分が少なからず機能していたからではなかろうか。

注

- (1) 小野武雄編『近世地方経済史料』第8巻所収。
- (2) 水戸市史編纂委員会『御定書 御郡方』所収。
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 須田本家文書の中に厚さ10cmほどもある大部な書冊が4冊ある。その地の部分には「須田氏蔵書一之巻」・「須田蔵書二之巻」・「須田記録三之巻」・「須田記録四之巻」とある。寛延3年6月「指銭改様之事」はその「一之巻」所収。
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 茨城県編さん委員会「近世史料」Ⅰ・Ⅱとして刊行されている。
- (8) 注(5)の「須田氏蔵書一之巻」所収。
- (9) 注(7)による。なお、流謙は小物成（竹草箒代・鳥運上・江戸米掛り）を指銭から除外している。また、ここで浮役について桃蹊齋『税法私考』（『日本農民史料聚粹』第11巻所収）を見ると、同書では「古へは小物成と称せしと見え」「浮役と云える名目も定法にあらざる物より取納る故の名目と見えたり」「凡浮役は田租の外其土の産物何国にても有る事」等と記されている。小論では小物成・浮役の語を正租に対する雑税を意味するものとして使用する。
- (10) 注(5)の「須田蔵書二之巻」所収。
- (11) 小検見指銭の語は寛延3年6月「指銭改様之事」に見られるが、『税法私考』にもその項目がある。同書では小検見指銭について「年々八九月の比田方小検人來り稲の熟夫熟を檢察し、又は大検見とて御郡奉行廻りて歩刈を為し小検人の為す所の当否を視る、是等の時の入費なり」と説明されている。
- (12) 注(5)の「須田蔵書二之巻」所収。
- (13) 寛永検地帳の屋敷地の復元を試みたが（拙稿「茨城県行方郡田牛堀村須田本家文書の研究—永山村絵

指銭の種類と負担をめぐって

図を中心に一」『明治大学人文科学研究所紀要』第54冊所載), 地域のまとまりという面からも組についてはまだ充分明らかではない。

- (14) 注(12)に同じ。
- (15) 茨城県立歴史館所蔵。
- (16) 拙稿「茨城県行方郡旧牛堀村須田本家文書の研究—永山村寛永検地帳を中心に一」『明治大学人文科学研究所紀要』第50冊所載。